

令和 6年 3月 1日

福岡県教育委員会教育長 殿

所属校名 福津市立福間小学校
職・氏名 教諭 逸見 和久
指導者名 教諭 坂牧 淳

研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号
TEL (092) 741-4731
FAX (092) 741-4744

3 研究主題及び副題

気付きの質を高める第2学年生活科学習

～働きかける活動と表現する活動が連続する単元構成を通して～

4 研究内容の概要

(1) 主題の意味

気付きとは、子供が対象と出会い、内面に生まれた事実、疑問、関係などの知的側面と興味や関心、愛着などの情意的側面を含んだ、子供が対象について捉えたことである。

気付きの質が高まるとは、対象を捉える知的側面での気付きの高まりとともに、愛着やこだわりといった情意的な側面も高まり、最後は自分との関わりで対象を捉えることである。

気付きの知的側面が高まるとは、初めは対象に対する事実や疑問といった無自覚で個別的だった気付きを、自覚したり、関係的にしたりすることである。関係的な気付きが生まれる過程には、2つの場合があると考えられる。1つは、複数の気付きを比較、分類して、共通点や違いを見いだす場合である。2つは、複数の気付きを関連付けて、つながりを見いだす場合である。

気付きの情意的側面が高まるとは、興味や関心、愛着をもって対象と関わりながら、「育てているうさぎが元気だから嬉しい」「支えてくれる人に感謝したい」というように、対象との関わりで感じ方が変化していくことである。

自分との関わりで対象を捉えるとは、自分にとっての対象の価値に気付くことである。対象との関わりで自分が変化していくことや、自分の生活と深く関わっていることに気付くようなことである。

気付きの質を高める第2学年生活科学習とは、対象に働きかける活動と、そこでの気付きを表現する活動が連続して行われ、個別の気付きから関係的な気付きへ、興味関心から愛着やこだわりへと、知的側面と情意的側面が絡み合いながら、一体となって高まっていく学習である。そのようにして気付きの質が高まった子供の具体的な姿を、以下のように定義する。

- | | |
|------------------------------------|---------|
| ○ 個別の気付きを比較、分類して、関係的な気付きとして捉えている子供 | (知的側面) |
| ○ 対象への愛着をもち、対象との関わりで感情が変化している子供 | (情意的側面) |
| ○ 対象が自分にとってどのような価値があるのかを捉えている子供 | (価値的側面) |

(2) 副題の意味

働きかける活動とは、子供が対象を「見る」「聞く」「触れる」「作る」ことで、対象と直接的に関わることである。働きかける活動では、主に情意的側面での気づきを高めることをねらいとする。繰り返し対象と関わることで、子供は対象に対する興味や関心を抱くようになる。

表現する活動とは、気付いたことを「言葉」「絵」「動作」「劇」などで表すことによって対象と間接的に関わる活動である。表現する活動では主に知的側面での気づきを高めることをねらいとする。

働きかける活動と表現する活動が連続するとは、目的をもって対象へと働きかけ、表現する活動が必然性を伴って行われることである。表現する活動が必然性を伴って行われるとは、働きかける活動と表現する活動に同じ目的意識があり、気づきの表現が一体となって構成されていることである（図1）。

働きかける活動と表現する活動が連続する単元構成とは、単元を「出会う」「関わる」「関連付ける」「価値を捉える」の4段階で構成し、働きかける活動と表現する活動が連続するようにすることである（表1）。

(3) 仮説実証のための着眼

ア 働きかける活動における環境構成の視点

働きかける活動において、次の2つの目的で環境を構成する。1つは、対象への愛着や関心といった、情意的側面での気づきの高まりを促す環境である。具体的には「対象と繰り返し関わるができる材料や場」である。2つは、情意的側面での気づきの高まりを知的側面での気づきの表出につなげる環境である。具体的には「個別の気づきが視覚化された掲示物」と「視覚的に気づきと比較、分類され、関連付けができる場」である。

イ 気づきの関連付けを促す手立て

(7) 個人で気づきを関連付ける表現活動の設定

単元の「関連付ける」段階において、気づきを関連付けるための表現活動を設定し、対象へ働きかける活動や表現する活動で気づきを共有する際の明確な目的として位置付ける。気づきが関連付くための表現活動の条件は2つある。①言葉や絵によって気づきを表現する際、気づきが自然と関連付くような項目を設定すること、②子供にとっての必然性や明確な目的意識があることである。

(4) 他者との関わりで気づきを関連付けるための比較、分類する活動の位置付け

単元を通して、気づきを表現し合う際に、比較、分類するための視点と活動を設定する。子供が気づきを発表し、複数の気づきが出された際に、「似ている点」「違って点」「つながっている点」を話し合う活動を繰り返し行うことで、気づきを共有する際に自然と比較したり分類したりできるようになる。

ウ 働きかける活動から表現する活動へ連続する条件

働きかける活動と表現する活動が連続して行われるよう、次の2つの条件を満たすような活動を設定する。1つは、「働きかける活動に新たな視点があり、対象への働きかけが多様であること」である。2つは、「働きかける活動に表現する目的が含まれていること」である。

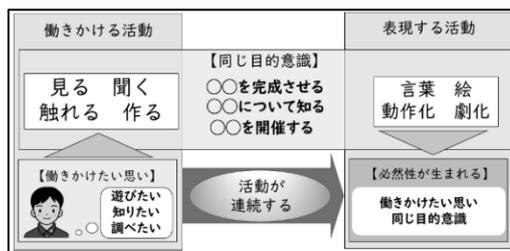


図1 働きかける活動と表現する活動の連続

表1 働きかける活動と表現する活動が連続する単元構成

段階	出会う	関わる	関連付ける	価値を捉える
目的	・対象に興味や関心を抱く	・対象への個別的な気づきをもつ ・興味、関心を愛着に向かわせる	・対象への気づきを関連付ける ・愛着や関心を抱く	・対象を自分との関わりで捉える ・自分にとっての価値に気づく
内容	・これから対象とどう関わりたいか	・対象はどんな様子か ・対象についてどんなことに気付いたか	・どんな共通点があるか ・どんな違いがあるか ・つながりがあるか	・どのように対象と関わってきたか
方法	①対象を提示する ②計画や目標を立てる活動を設定する	①対象と直接関わる活動を設定する ②気付いたことを言葉で表現する活動を設定する	①気づきが関連付く表現活動を設定する ②働きかけながら表現する活動を設定する ③気づきを共有する活動を設定する	①これまでの学習を振り返る活動を設定する ②単元を通して気付いたことを表現する活動を設定する
活動の連続	【子供の目的意識】 関わり方の見直しをもつ	【子供の目的意識】 対象の様子や気づきを記録、蓄積する	【子供の目的意識】 これまでの気づきをまとめる	【子供の目的意識】 対象との関わりを振り返る
	働きかけ 見る 聞く	表現 働きかけ 見る 触れる	表現 書く 動作化 触れる 話す	表現 働きかけ 書く、作る 劇化 見る 触れる 書く

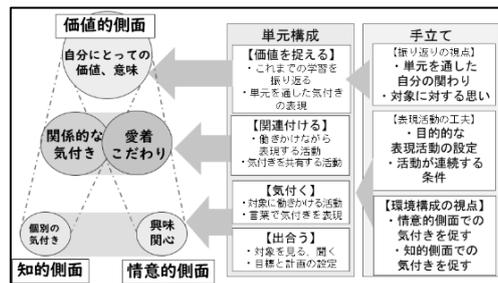


図2 研究構想図

(4) 指導の実際 (10 月実証)

ア 単元名 第2学年「わたしとカタツムリの3ヶ月」

イ 単元の目標

- カタツムリの特徴や生命をもっているということ、カタツムリに対する自分の関わり方の変化や成長に気付くことができる。(知識及び技能の基礎)
- カタツムリへの働きかけを通して気付いたことを比べたり、分類したり、関連付けたりしながら、関わり方を工夫して働きかけることができる。(思考力、判断力、表現力等の基礎)
- カタツムリに親しみをもち、愛着をもって働きかけることができる。(学びに向かう力、人間性等)

ウ 計画(11時間)

- (ア) カタツムリと出合い、活動の計画を立てる。————— 3時間
- (イ) カタツムリを飼育しながら、思い出のアルバムをつくる。————— 6時間
- (ウ) カタツムリをどうするか話し合い、カタツムリへの手紙を書く。————— 2時間

エ 単元の仮説

第2学年単元「わたしとカタツムリの3ヶ月」の学習において次の手立てを行えば、気付きの質を高める子供が育つであろう。

○ 働きかける活動における環境構成 [着眼ア]

働きかける活動において、カタツムリと繰り返し関わるようにするための、子供の求めに応じた餌・道具コーナーを設置した環境構成によって、情意的側面と知的側面の両面で気付きの質を高めることができる。

○ 表現する活動における手立て [着眼イ]

働きかける活動と表現する活動が連続するよう、カタツムリと直接関わり、そこでの気付きを日記やアルバムで表現する活動を設定することで、気付きの質を高めることができる。

○ 気付きの視覚的な蓄積を基にした振り返り活動の設定 [着眼ウ]

振り返りの際に、「対象に対する思い」や「これからの対象への関わり方」の視点を設定し、具体的に振り返ることができるように、写真や映像、ポートフォリオを活用することで、対象への愛着の高まりや自分の成長や変化を捉えることができる。

オ 指導の実際

本単元は、3ヶ月という期間でのカタツムリの飼育を通して、カタツムリの特徴や生命をもっていることに気づき、愛着をもって飼育することをねらいとした。

(ア) 出合う段階 (1/11時間)

出合う段階では、実際にカタツムリに出会い、そこで感じたことやこれからの目標を話し合うことで、興味、関心を抱くことをねらいとした。まず、1ヶ月前から教室で教師が飼育していたカタツムリを提示し

【着眼ア】、「生き物を飼育する学習で、何を育てたいか」を問い、話し合いを設定した。すると「自分たちも飼育してみたい」という結論を出し、「どのように飼育するのか」「必要な道具は何か」「カタツムリを飼うことでどんなことを学びたいか」の3つの視点で計画を立てた【着眼イ(イ)】。その後、一人一匹のカタツムリを出迎え、出合った時の感想を話し合うと資料1のような発言が出た。

考察1

カタツムリに興味や関心をもち、初めて見たカタツムリの様子を見て、個別の気づきをもつことができている。これは、実際に対象に出会い、触れるという働きかける活動で直感的に気付いたことを連続的に表現することが、興味を引き出す上で有効であったと考える。その根拠は、資料1のC1のように、カタツムリに興味を感じた発言をする姿や、C2のように、カタツムリの様子を観察して、動きに気づき、関心を示す姿からである。

C1: 思ったよりも可愛かったです。
C2: 目を合わせてもそっぽを向きます。
C3: 思っていたより歩くのが速かったです。
I児: 気持ち悪い。触るのは無理そう。

資料1 子供の発言

(イ) 関わる段階（2～7／11時間）

気付く段階では、カタツムリを飼育する活動を通して、カタツムリへの生態や特徴に気付き、興味や関心を愛着に向かわせることをねらいとした。気付く段階の前半では子供の求めに応じて、カタツムリに餌をあげたり住処を作ったりし、後半ではカタツムリについて気付いたことを日記に書いて蓄積していく活動を設定した【**着眼イ(イ)**】。日記は掲示スペースを作成し、更新する度に掲載した【**着眼ア**】。そこで、資料2のような気付きが見られた。

- ・カタツムリが歩くとねばねばしたものが残っている
- ・紙の上に置くと紙に穴が空いていた
- ・手を近づけると殻にこもる
- ・食べた野菜と同じ色の糞をする
- ・殻が右巻き ・目を合わせてくれる
- ・水をかけると殻から出てくる

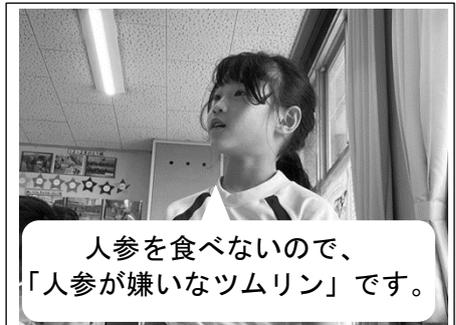
資料2 気付く段階での個別の気付き

考察2

気付く段階では、知的側面と情意的側面の両面で気付きを高めることができた。これは、子供の求めに応じて、多くの餌や住処の材料などを子供が繰り返し試すことのできる環境を設定したことや、気付いたことを即時的に表現できる日記とその掲示を継続的に行ったことが有効であったと考える。その根拠は、資料2の「歩くとねばねばしたものが残る」「食べた野菜と同じ色の糞をする」というような、繰り返し関わることで気付いている姿や、資料2の下線部のように、カタツムリに対しての愛着が生まれた気付きが見られたからである。

(ウ) 関連付ける段階（8／11時間）

関連付ける段階では、子供達の「残りの時間を思い出に残したい」という思いから、アルバムを作成することになった【**着眼イ(ウ)**】。働きかける段階では、アルバムの1つのページにある、「カタツムリのプロフィール」の項目を書くために、実際に餌をあげたり、住処を作ったりする活動を設定した。その際、子供たちの働きかけが試行錯誤しながら行われるよう、多様な餌や、枝や土といった材料を準備し、プロフィールの項目に合わせて設置した【**着眼ア**】。子供たちは、自分のカタツムリを観察する場と、餌や材料がある場を行き来しながら、カタツムリに繰り返し働きかけ、生態や特徴が詳しく分かるようなプロフィールを書いていた。その中で、第1時ではカタツムリに対して否定的な見方をしていたI児が、カタツムリの周りに石や砂を置き、スプレーで水をかけて動きを観察していた。次に、完成したプロフィールをもとに「〇〇な△△（名前）」という形であだ名を考え、お互いに発表する活動を設定した【**着眼イ(イ)**】。その際、I児は「人参が嫌いなツムリン」というあだ名を考え、「人参が嫌いだから」という理由を発表した（資料3）。



資料3 あだ名を発表するI児

考察3

自分の気付きと他者の気付きを比較して、「違い」を見つけることで関連付けることができていた。これは、アルバムを作るという表現活動を設定し、実際に働きかけてカタツムリの特徴を調べる学習と、そこでの気付きをあだ名として表現する活動が連続することが有効であったと考える。その根拠に、他のカタツムリが人参を食べていることに対し、自分のカタツムリが人参を食べないことに気付いたI児の「人参を食べないので」という発言が挙げられる。

カ 全体考察

価値を捉える段階でとったアンケートの項目「カタツムリの学習を通して何を学んだか」という質問に対し、生命の大切さについての気付きを記述した子供が全体の79%という結果であった。これは、働きかける活動と表現する活動が連続するように単元を構成し、情意的側面と知的側面での気付きが表出し、自覚化できるような環境構成や気付きを関連付ける表現活動を設定したことが有効であったと考える。しかし、気付きの共通点や、つながりを見いだすことができていなかったため、表現する活動において、他者との関わりで気付きを比較、分類できるような活動を設定することが必要である。

(5) 指導の実際（12月実証）

ア 単元名 第2学年「もうすぐ3年生～わたしのかい花物語～」

イ 単元の日標

- 学習面や生活面、心や体の成長がつながっていることや、成長を支えてくれる人達の存在や努力した自分に気付くことができる。 (知識及び技能の基礎)
- 前の自分と今の自分を比較したり、友達や先生からの言葉を関連付けたりして、自分の成長について考え、表現することができる。 (思考力、判断力、表現力等の基礎)
- 自分の成長への自信や、生活や成長を支えてくれた人達への感謝の気持ちを持ち、意欲をもって生活しようとしている。 (学びに向かう力、人間性等)

ウ 計画(8時間)

- (ア) 成長したことや場面を話し合い、「1年生に成長を伝える」という目標を設定する。——1時間
- (イ) 自分の成長を振り返り「かい花のひみつノート」にまとめる。——4時間
- (ウ) 「かい花アルバム」を完成させ、1年生に紹介する。——3時間

エ 単元の仮説

第2学年単元「もうすぐ3年生～わたしのかい花物語～」の学習において次の手立てを行えば、気付きの質を高める子供が育つであろう。

○ 働きかける活動における環境構成【着眼ア】

働きかける活動において、成長したことが分かる写真やお家の方からのインタビュー用紙、同質グループの設定といった環境構成によって、成長を自覚し、自分の成長への自信やこれからの生活への意欲といった情意的側面での気付きを促すことができる。

○ 気付きの関連付けを促す手立て【着眼イ】

自分で気付きを関連付けるための表現活動として「かい花のひみつノート」「かい花アルバム」を設定し、単元を通して記述した内容を比較、分類する活動を位置付けることによって、他者との関わりで気付きを関連付けて、共通点や違い、つながりを見いだすことができる。

○ 働きかける活動から表現する活動へ連続する条件【着眼ウ】

働きかける活動と表現する活動が連続するよう、体験したり、聞いたりして成長を見つける活動と成長したことを共有してさらに成長に気付いていく活動を設定することで、子供が気付きを即時的に表現する必然性が生まれ、知的側面での気付きの質を高めることができる。

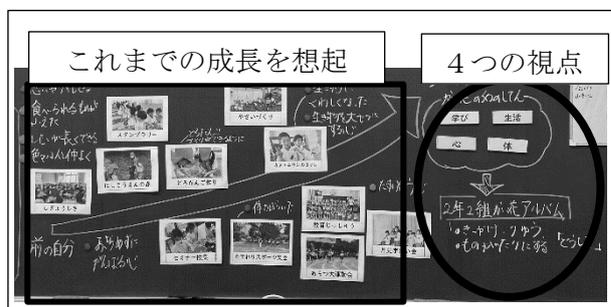
オ 指導の実際

(7) 出合う段階（1／8時間）

出合う段階では、1年生からのインタビュー動画を提示し、「成長した秘密を教えてほしい」という発言を取り上げ黒板に掲示した【着眼ア】。次に、自分達がどのように成長しているのかを1年間の行事の写真を基に振り返り、1年生にどのように成長を伝えたいかを話し合う活動を設定した【着眼ウ】。すると、「走りが速くなった」「発表が増えたよ」と成長への気付きを表現し、「学習面」「生活面」「心」「体」の4つに、成長を分類した(資料4)。

考察1

自分達の成長を大きく「学習面」「生活面」「心」「体」の4つに分類し、「4つのかい花(成長)」を調べて、自分たちの「成長アルバム」を作りたいという結論を出したことができ、自分の成長に気付き、成長の具体について調べていきたいという興味、関心をもつことができている。これは、1年生からのメッセージや、行事を振り返る写真といった環境構成と、成長を振り返った後に、成長をどう伝えていきたいかを話し合うという連続した活動が有効であったと考える。



資料4 子供たちが話し合った板書

(イ) 関わる段階（2～6／8時間）

気付く段階では「体」「学習面」「生活面」「心」の視点ごとに、自分の成長について振り返る活動、成長の具体と成長したきっかけを「かい花のひみつノート」にまとめ、お互いに交流する活動を設定した【**着眼イ**】。働きかける活動では、実際に身長を測ったり、身近な人へインタビューしたりした。表現する活動では自分が1番だと考える成長の具体と成長のきっかけをまとめる活動を設定した【**着眼イ**】（資料5）。

C1：インタビューをして、この1年間で生活リズムが整っていることがわかった。
C2：1年間誰とでも「仲良くしようとする心」がこんなに成長できるのだと思いました。

資料5 授業後の子供の振り返り

考察2

資料5のC1やC2の具体的な成長に気付いている発言から、知的側面と情意的側面での両面での気付きが生まれていたことがわかる。このことから、働きかける活動と表現する活動が連続するよう、自分の成長を考え、その気付きを共有する活動を設定したことが有効であったと考える。

(ウ) 関連付ける段階（7／8時間）

関連付ける段階では、「成長アルバム」に、1人1ページを割り当て、クラス全体で成長の秘密をまとめる「成長のひみつ〇カ条」という活動を設定した【**着眼イ**】【**着眼ウ**】。働きかける活動では、これまでに見つけた自分の成長を振り返り、「成長のひみつを考える」活動を設定した。表現する活動では、成長の秘密に4つの視点のうち、どの成長が関係しているのかを色を塗って表し、学級全体で共有する活動を設定した【**着眼イ**】（資料6）。



資料6 共通点を見いだした秘密

考察3

複数の成長から「成長するきっかけ」の共通点やつながりを見だし、共通する「成長のひみつ」として関係的な気付きに高めることができていた。その根拠として、資料6のように、複数の成長に関係する「成長の秘密」を考え、4つの視点で分けていた全ての色を使って塗っていた子供が87%いた。これは、「成長のアルバム」という表現活動を設定したこと、活動が連続するよう、表現する活動に「成長の秘密をまとめる」活動を位置付け、気付きを比較させたことが有効であったと考える。

カ 全体考察

単元後に実施したアンケート「今回の学習で気付いたこと、考えたことは何か」という項目で、「成長には自分の頑張りや」周りの人の協力が大切」という知的側面での高まりについての記述が81%、「たくさん成長できた」「成長を知れて嬉しかった」という情意的側面での高まりについての記述が78%であった。これは、成長への気付きを視覚化した環境構成や、働きかける活動と表現する活動が連続するための「成長のひみつをアルバムにまとめる活動」を設定したことが有効であったと考える。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

- 対象と繰り返し関わる材料や場、これまでの気付きを蓄積した掲示物といった環境構成は、気付きの情意的側面での高まりを促す上で有効であった。
- 働きかける活動と表現する活動を同じ目的意識の基で設定し、連続させることは、個別の気付きを関連付け、関係的な気付きに高める上で有効であった。

(2) 課題

- 個々での気付きの関連付けは有効であったが、他者との関わりの中で関連付けることができていなかった。他者との関わりで気付きを比較、分類する活動に、必然性をもたせる必要がある。

6 研修を修了しての感想

子供の体験から気付きを生み出し、その質を高めていく学習の在り方を学ぶことができました。また、子供主体の授業、子供の言動から気付きを見取る大切さを学ぶことができました。

備考 ○ 在籍校と電話番号 福津市立福間小学校 TEL (0940)42-0073